



県中部のニホンアカガエル成体

県西部でのカエル合戦（撮影：瀬下亜希さん）

冬の雨夜に水田から「キョツキョツキョツ」と聞こえたら、それはニホンアカガエルのオスの声かもしれない。オスは体長35～50mmで、浅い水場から顔を出して鳴きながらメスを待つ。メスを見つけたオスはすかさず抱接する。別のオスがやってくるとたちまちカエル合戦がはじまる。メスはオスよりもひとまわり大きく45～70mmで、お腹は大きく500～3000個の卵を産み、円形の卵塊をつくる。この光景は1月から3月まで見られ、繁殖を終えた個体は5月まで休眠をとる。カエル好きの人にとっては冬の風物詩である。

本種はアカガエル科の日本固有種で、本州、四国、九州、隠岐、大隅諸島の平地や丘陵地に分布する。学名の*Rana japonica*からも分かる通り、まさしく日本のアカガエルである。本種は1858年に大英博物館の学芸員で数多くの脊椎動物を記載したアルベルト・ギュンター氏によってヨーロッパアカガエルの変種（現在では亜種に相当する）として記載され、1879年にジョージ・アルバート・ブーレンジャー氏によって新種として記載された。

体の特徴は名前の通り背面が褐色で、皮膚の表面はなめらか。腹面は白く、眼の後ろから前あしにかけて黒色の模様が入る。同地域にも分布し、外見が似る同属のヤマアカガエルとは、のどの斑点模様の有無や、背側線を観察することで、同じく同属のタゴガエル及びネバタゴガエル、ナガレタゴガエルとは指先が広がるかどうかで識別できる。

静岡県内における本種の分布は中西部の平地に偏っている。かつては沼津市以西から分布していたとされているが、平地の少ない東部地域では開発の影響を受け、生息地のほとんどが消失してしまった。現在生息が確認されている中西部においても、圃場整備による水路の三面コンクリート化・乾田化、道路工事に伴う環境改変によって生息頭数は減少し続けている。また、特定外来生物に指定されているウシガエルやアライグマによる食害も懸念されており、静岡県レッドでは本種を守るため、絶滅危惧Ⅱ類に指定している。

保全には、本種の分布と繁殖状況を知る基礎的な調査と、その結果を基にした開発時の路線の変更と工法の見直しが必要である。しかし、生息地が民地であることも多いため、調査にあたっては住民の理解と、調査員同士のネットワークが必要である。県内では静岡県自然環境調査委員会両生爬虫類部会の調査員がおこない、国内規模では日本爬虫両棲類学会や日本両生類研究会の専門家、カエル探偵団の団員が積極的に取り組んでいる。

これから気温が上がり、水田の周りでは休眠から目覚めた本種の成体と、孵化した幼生を見ることが出来る。人と共存してきた本種が、我々の勝手な行動によって絶滅することのないよう、配慮していきたい。